

**【九州大学大学院芸術工学府 芸術工学専攻（修士課程） 音響設計コース】  
（2022年度以降入学者）**

**1) ディプロマ・ポリシー**

**教育の目的**

芸術工学専攻において養成する人材像は、九州大学教育憲章に定める教育の目的と4つの原則（人間性の原則、社会性の原則、国際性の原則、専門性の原則）を踏まえ、人類が直面する課題に真摯に向き合うため、科学技術と芸術的感性を融合する「技術の人間化」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大する新しいデザイン領域に対する意識と人文、社会、自然にまたがる広い知識を基盤とする「高次のデザイナー」である。

また現代社会においては、音文化に対する深い理解を備え、音に対する正しい評価、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化等を高度に推進できる専門家が求められている。音響設計コースでは、音に関する芸術工学の視点に立脚し、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化、音に関する芸術文化の創造を実現できる人材の養成を目的としている。そのために、音響設計に関連する芸術、科学、技術の高度かつ先端的な知識を習得させ、その知識に基づいた基礎研究、応用研究、コンテンツ制作、実践を行う場を提供する。

音に関連する芸術、科学、技術の高度かつ最先端の知識に基づき、環境の特性を熟知した視聴覚情報のトータル・コミュニケーションのデザインを担える人材を育成する。

- ・音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、高度な専門的知識を有し、概念、考え方、方法論について十分に理解して説明することができる。
- ・課題解決のために、音に関連する芸術、科学、技術的な知識を活用し、人間に適合した音環境の創出、音響情報の高品質化、音に関する芸術文化の創造に資する研究を計画、遂行することができる。

本コースで掲げる教育課程を通して「芸術工学」の基本・基礎を十分に理解しながら到達目標を達成し、実社会において指導的立場を果たし得る能力を修得した者に修士（芸術工学）の学位を授与する。

また、アントレプレナーシップやデザイン実務に関する専門知識を修得し、特にデザインとビジネスに関する修士研究に取り組んだ者に修士（デザインストラテジー）を授与する。

**参照基準**

- (1) Subject Benchmark Statement – Music
- (2) Subject Benchmark Statement – Engineering
- (3) Subject Benchmark Statement – Art and Design
- (4) Subject Benchmark Statement – Anthropology
- (5) Subject Benchmark Statement – Psychology

**学修目標**

- ・ A-1. （主体的な学び）深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討することができる。
- ・ A-2. （協働）多様な知の交流を行い、他者と協働し問題解決にあたることのできる。

B. 知識・理解

- B-1. デザイン科学系統. 人間の視聴覚に関する知覚システムと生理的機序, 音声生成の仕組みなどに関する専門的知識について深く理解し, 的確に説明することができる。
- B-2. デザイン工学系統. 音を物理的に解析・制御・評価する方法, すべての人に適した音環境を設計する方法, 音響情報の適切な処理と伝達の方法などについて深く理解し, 的確に説明することができる。
- B-3. 設計・制作系統. 芸術・科学・技術を架橋するため, 音や音楽に関わる作品制作や表現理論, 技術について体系的に理解し, 説明することができる。
- B-4. 文化・社会デザイン系統. 芸術文化と歴史を現代社会に活かすため, 音や音楽に関わる歴史や文化における幅広い分野の知識を体系的に理解し, 説明することができる。

#### C-1. 適用・分析

- C-1-1. デザイン科学系統. 人間の視聴覚に関する知覚システムと生理的機序, 音声生成の仕組みなどに関する科学実験を計画, 遂行し, データを分析して, 解釈することができる。
- C-1-2. デザイン工学系統. 音を物理的に解析・制御・評価する方法, すべての人に適した音環境を設計する方法, 音響情報の処理と伝達の方法を適切に選択し, 分析することができる。
- C-1-3. 設計・制作系統. 音や音楽に関わる作品制作や表現理論, 技術に関する知識や実践力を活用し, 音文化の特徴や課題を明らかにすることができる。
- C-1-4. 文化・社会デザイン系統. 音や音楽に関わる歴史や文化における幅広い分野の知識を活用し, 音文化の特徴や課題を明らかにすることができる。

#### C-2. 評価・創造

- C-2-1. デザイン科学系統. 人間の視聴覚に関する知覚システムと生理的機序, 音声生成の仕組みなどに関する専門知識を総合的に活用しながら, 異なる分野との協働を通して, 実践的な方向性を示すことができる。
- C-2-2. デザイン工学系統. 音を物理的に解析・制御・評価する方法, すべての人に適した音環境を設計する方法, 音響情報の処理と伝達の方法などに関する専門知識を総合的に活用しながら, 異なる分野との協働を通して, 実践的な方向性を示すことができる。
- C-2-3. 設計・制作系統. 音や音楽に関わる作品制作や表現理論, 技術に関する知識や実践力を活用し, 異なる分野との協働を通して, 音文化の実践的な方向性を示すことができる。
- C-2-4. 文化・社会デザイン系統. 音や音楽に関わる歴史や文化における幅広い分野の知識を活用し, 異なる分野との協働を通して, 音文化の実践的な方向性を示すことができる。

#### D. 実践

- D-1. 共通. 専門的な実践能力, 問題探求能力, 問題解決能力とともに, より高度なコミュニケーション能力を備え, 異分野との協働も視野に入れながら, 科学的知見の提示, 社会的な課題の解決, 文化の創造に貢献することができる。

## 2) カリキュラム・ポリシー

ディプロマ・ポリシーを達成するために, 別表(カリキュラム・マップ)の通り, 教育課程を編成する。

デザインに対する課題は現実社会から発せられるため、ほとんどの場合「分野横断的」である。デザインの営為が社会に対して有効であるためには、デザイン教育も横断的である必要がある。このため、芸術工学専攻内の 6 つのコースはそれぞれの専門性を深化させる一方で、コース間の障壁を下げて分野横断的な教育実践を可能とするため、少ない必修科目の設定、コース間共通科目の配置、分野横断を推進する科目群の配置、という考えに沿った単位履修制度とした。また特に芸術工学府は、その母体となる芸術工学部と同様に、実験・実習等の演習系科目を通して、自ら体験し、実践することを教育方法の中での重要な方針として掲げており、教育課程の編成に当たっても、この考え方を継承拡大している。

各コースで開講される科目は「2. (2) 横断的なデザインの修得：カリキュラムにおける「系統」の設定と横断的科目、4. (1) カリキュラム編成の基本方針及び図 3, 同(2) カリキュラムの体系性の説明」において示したとおり、「Ⅰ. デザイン科学系統」、「Ⅱ. デザイン工学系統」、「Ⅲ. 設計・制作系統」、「Ⅳ. 文化・社会デザイン系統」の 4 系統に分類され、全体を通して総合的なデザイン教育研究を可能にする。この 4 つの系統は、コースが提供する専門性を縦方向に並べると、これらを貫く「横串」となり、コース間の連携融合のための制度となる。系統は以下のように性格づけできる。

- Ⅰ. デザイン科学系統：デザインに関連する物事の原理、仕組みを追求する
- Ⅱ. デザイン工学系統：デザインに関連する技術を開発する
- Ⅲ. 設計・制作系統：具体的な形、仕組み、やり方を作る
- Ⅳ. 文化・社会デザイン系統：デザインに関連する文化・社会のあり方を研究する

これら 4 つの系統には、それぞれ「講義」、「演習」また「共通」の性格を持つ専門科目が配置される。主として「講義」、「演習」の科目を通して、自らの専門分野にとらわれずに、学修目標 A（主体的な学び・協働）及び B（知識・理解）に対応する項目を修得し、さらに幅広く「共通」の性格を持つ科目によって幅広い領域への関心や意欲、課題に取り組む態度を修得、さらに問題解決のための実践的な能力や技能を修得する。これは学修目標 C（能力：適応・分析、創造・評価）並びに D（実践：知識・理解の実践的場面での活用）に対応する。

### 【コースワーク】

音響設計コースでは、メディアアート特論などの設計・制作系の科目や聴覚文化論などの文化・社会デザイン系統の科目を通して、音に関する幅広いトピックへの関心を広げ（到達目標 A）、学士課程の教育と修士課程での高度で実践的な教育・研究へのシームレスな接続を行うために、聴覚心理学などデザイン科学系統の科目や音響工学特論などデザイン工学系統の科目を通して、修士課程の研究で必要な知識・理解能力を修得する（到達目標 B）。さらに、各系統に配置される演習科目、コース共通の科目であるスタジオプロジェクトや芸術工学演習などを通して、音響設計に関する能力や様々な技能を（到達目標 C）、実践的に修得する（学修目標 D）。

### 【研究指導体制】

#### 1) 異なるコースと共同での修士研究中間報告

2 年間にわたる修士研究の中で、1 年次修了時に芸術工学演習の一環として修士研究の中間発表会を開催する。芸術工学府は、デザインの対象に対応した 6 コースが縦軸となり、横軸としてデザイン科学系統、デザイン工学系統、設計・制作系統、文化・社会デザイン系統の方法論別の系統が配置されていることが特徴である。この中間発表会は、横軸である各系統別で開催される。これによって、例えば音響設計とメディアデザインのように、異なるデザイン対象でありながら、研究方法において同様な専門性を有する教員や学生から幅広い批評を得る機会を設ける。また 2 年次修了時、修士研究の最終的な評価はコースごとに行い、質の保証を確実に行うものとする。

## 2) 複数の教員による修士論文指導

芸術工学府の学生に対しては、上述の中間報告を終えた2年次進級時に、主指導教員とともに、副指導教員を1~2名割り当てる。このときの考え方として、主指導教員とは異なる専門性を有する副指導教員により、専門性の幅を広げる方向性を担保することとする。

なお、副指導教員は、芸術工学府の教員に限定せず、他学府、国内外を問わず他大学からも割り当て可能とする。具体的な割り当ては学生の資質・希望を勘案して主指導教員との協議によって定める。

学生は、2年次の各クォーターに1回以上、副指導教員へ進捗を報告し、指導を受けることとする。この指導は必ずしも対面によらず、オンライン形式も含んだ形も可能とする。学生は指導を受けた記録を残し、主指導教員と共有し、その後の修士研究推進に活用する。

### 【学位論文審査体制】

修士論文調査委員会を組織して審査を行う。この委員会は主指導教員及び副指導教員をそれぞれ主査、副査とし、その他各「系統」における芸術工学演習の一環として実施される中間発表時の評価者等で構成する。また、学術面のみならずデザインの社会への展開の観点からの評価を受ける趣旨から、学外の企業等でデザイン実践を行う関係者からアドバイスをもらう機会も確保し、必要に応じて調査委員会への参画も進める。

学位論文評価基準として5つの評価項目(1. 研究の課題設定、2. 先行研究の理解と提示、3. 研究方法の妥当性、4. 論証方法や結論の妥当性と意義、5. 論文の形式・体裁)を、修士作品評価基準として5つの評価項目(1. 作品の課題設定、2. 先行作品・先行研究の理解と活用、3. 作品の制作方法と技術力、4. 作品の表現力と意義、5. 作品説明書の形式・体裁)を設け、修士論文及び修士作品の審査の際に、審査委員がそれぞれの観点から評価し、最終試験の可否を判定する。

### 【継続的なカリキュラム見直しの仕組み(内部質保証)】

カリキュラムは、二つの分節に区分して運用する。第1分節(1年~2年前半)は、基盤的な学びの姿勢と知識・理解を習得し、発展的な知識・理解およびその活用力を習得する「導入・基礎」期、第2分節(2年後半)は、知識・能力の統合と新しい知識の創出に取り組む「統合」期と位置づける。

当該分節の中で焦点化した学修目標の達成度は、それぞれの分節の終盤に、以下の方針(アセスメント・プラン)に基づいて評価し、その評価結果に基づいて、授業科目内の教授方法や授業科目の配置等の改善の必要がないかを学務専門委員会の下に設置するカリキュラム検討WGにおいて検討することで、教学マネジメントを推進する。

### 【アセスメント・プラン】

- ・「導入・基礎」期の評価：研究計画に基づき着実に研究が進行しているかどうかを修士研究中間発表会にて確認する。
- ・「統合」期の評価：修士論文及び修士作品審査と修士研究発表会にて確認する。

## 3) アドミッション・ポリシー

### 求める学生像

九州大学では、九州大学教育憲章の理念と目的を達成するために、高等学校等における基礎的教科・科目の普遍的履修を基盤とし、大学における総合的な教養教育や専門基礎教育を受け、自ら学ぶ姿勢を身に付け、さらに進んで自ら問いを立て、創造的・批判的に吟味・検討し、他者と協働し、幅広い視野で問題解決にあたる力を持つアクティブ・ラーナーへと成長する学生を求めている。

芸術工学専攻修士課程では、九州大学が求める学生像を踏まえ、本学府の理念である

「技術の人間化」に基づき、技術を人間生活に適切に利用するための道筋を設計でき、指導的立場を果たし得る「高次のデザイナー」の養成を目的としており、本専攻での就学を目指す学生には次のことが求められている。

- ・芸術工学に関連する高度な専門知識を修得し、社会の課題を発見・提起でき、かつ解決・実践する力を修得するために、人文、社会、自然にまたがる知識、論理的な思考能力、芸術的感性を有する。
- ・広い視野に立って異なる専門領域や価値観・文化が異なる者と協力・連携しながら課題解決へ向かう力を修得するために必要な、国際性、多様性に対する好奇心・配慮、豊かな寛容性と柔軟性を有する。
- ・自らの強み、経験、専門的知識を有効的に活用し、新しいデザイン領域を開拓・先導するために必要な自己・社会分析力、柔軟な思考力・対応力、創造的意欲、行動力を有する。

これらに加えて、音響設計コースにおいては、次のいずれかを有する学生を求める。

- ・音響学の基礎的な現象および理論の理解に基づき、音響に関する現象や表現を自然科学や人文科学の観点から説明する能力を有する。
- ・音響設計の専門家として必要な音に対する感性と、音文化学、音響環境工学、音響情報科学といった音響に関わる代表的な分野についての専門的知識を有する。
- ・音響設計に関わる諸課題を解決するため、それらを統合して応用する能力を有する。
- ・音に関する文化、環境、情報の視点からデザイン対象に多面的にアプローチし、音に関わる新しい芸術、科学、工学の分野を切り開く力を有する。

### **入学者選抜方法との関係**

修士課程では、自己推薦入試及び一般入試を実施する。

自己推薦入試は、提出書類（研究計画書、業績概要書、自己推薦・志望理由書、成績証明書、外部英語試験スコア）と面接（プレゼンテーション、質疑応答、口頭試問）の成績を総合して判定する。

一般入試は、英語（外部英語試験スコア）、専門科目及び面接（プレゼンテーション、口頭試問）の成績を総合して判定する。

# 芸術工学府芸術工学専攻 音響設計コース カリキュラムマップ

科目区分

凡例 科目区分

修士研究関連科目	スタジオプロジェクト科目	音響設計コース コア科目	展開科目	共通科目
修士研究関連科目	スタジオプロジェクト科目	音響設計コース コア科目	展開科目	共通科目

(再掲は薄色表示)

(再掲は薄色表示)

学修目標			M1				M2				
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	
D.実践	共通	D-1. 専門的な実践能力, 問題探求能力, 問題解決能力とともに, より高度なコミュニケーション能力を備え, 異分野との協働も視野に入れながら, 科学的知見の提示, 社会的な課題の解決, 文化の創造に貢献することができる。	輪講				輪講				
			音響設計特別講話				音響設計特別講話				
			インターンシップI	インターンシップII			インターンシップI	インターンシップII			
			インターンシップIII				インターンシップIII				
			芸術工学特別プロジェクトIII				芸術工学特別プロジェクトIII				
			芸術工学特別プロジェクトVII				芸術工学特別プロジェクトVII				
			芸術工学特別プロジェクトVIII				芸術工学特別プロジェクトVIII				
			アカデミックイングリッシュ				アカデミックイングリッシュ				
			ホール工学技術演習				ホール工学技術演習				
			スタジオプロジェクトI	スタジオプロジェクトII	スタジオプロジェクトIII	スタジオプロジェクトIV	スタジオプロジェクトI	スタジオプロジェクトII	スタジオプロジェクトIII	スタジオプロジェクトIV	
C-2.評価・創造	文化・社会デザイン系統	C-2-4. 音や音楽に関わる歴史や文化における幅広い分野の知識を活用し, 異なる分野との協働を通して, 音文化の実践的な方向性を示すことができる。	音楽社会文化特論		民族音楽学特論		音楽社会文化特論		民族音楽学特論		
			言語学特論		聴覚文化論特論		言語学特論		聴覚文化論特論		
	設計・制作系統	C-2-3. 音や音楽に関わる作品制作や表現理論, 技術に関する知識や実践力を活用し, 異なる分野との協働を通して, 音文化の実践的な方向性を示すことができる。	音響芸術特論		作曲学特論		音響芸術特論		作曲学特論		
					サウンドデザイン特論				サウンドデザイン特論		
	デザイン工学系統	C-2-2. 音を物理的に解析・制御・評価する方法, すべての人に適した音環境を設計する方法, 音響情報の処理と伝達の方法などに関する専門知識を総合的に活用しながら, 異なる分野との協働を通して, 実践的な方向性を示すことができる。	ホール工学技術演習		ホール工学技術特論		ホール工学技術演習		ホール工学技術特論		
			音声情報学特論		計算音響学		音声情報学特論		計算音響学		
			音響制御特論		福祉音響学		音響制御特論		福祉音響学		
			音響工学特論		音響イメージング特論		音響工学特論		音響イメージング特論		
			音響信号処理特論		音響環境学特論		音響信号処理特論		音響環境学特論		
			音環境評価特論				音環境評価特論				
	デザイン科学系統	C-2-1. 人間の視聴覚に関する知覚システムと生理的機序, 音声生成の仕組みなどに関する専門知識を総合的に活用しながら, 異なる分野との協働を通して, 実践的な方向性を示すことができる。	音声生成特論		聴覚心理学特論		音声生成特論		聴覚心理学特論		
					聴覚生理学特論				聴覚生理学特論		
					時間知覚特論				時間知覚特論		
	C-1.適用・分析	文化・社会デザイン系統	C-1-4. 音や音楽に関わる歴史や文化における幅広い分野の知識を活用し, 音文化の特徴や課題を明らかにすることができる。	音楽社会文化特論		民族音楽学特論		音楽社会文化特論		民族音楽学特論	
				言語学特論		聴覚文化論特論		言語学特論		聴覚文化論特論	
設計・制作系統		C-1-3. 音や音楽に関わる作品制作や表現理論, 技術に関する知識や実践力を活用し, 音文化の特徴や課題を明らかにすることができる。	音響芸術特論		作曲学特論		音響芸術特論		作曲学特論		
					サウンドデザイン特論				サウンドデザイン特論		
デザイン工学系統		C-1-2. 音を物理的に解析・制御・評価する方法, すべての人に適した音環境を設計する方法, 音響情報の処理と伝達の方法を適切に選択し, 分析することができる。	ホール工学技術演習		ホール工学技術特論		ホール工学技術演習		ホール工学技術特論		
			音声情報学特論		計算音響学		音声情報学特論		計算音響学		
			音響制御特論		福祉音響学		音響制御特論		福祉音響学		
			音響工学特論		音響イメージング特論		音響工学特論		音響イメージング特論		
			音響信号処理特論		音響環境学特論		音響信号処理特論		音響環境学特論		
			音環境評価特論				音環境評価特論				
デザイン科学系統		C-1-1. 人間の視聴覚に関する知覚システムと生理的機序, 音声生成の仕組みなどに関する科学実験を計画, 遂行し, データを分析して, 解釈することができる。	音声生成特論		聴覚心理学特論		音声生成特論		聴覚心理学特論		
					聴覚生理学特論				聴覚生理学特論		
					時間知覚特論				時間知覚特論		

# 芸術工学府芸術工学専攻 音響設計コース カリキュラムマップ

科目区分

凡例 科目区分

修士研究関連科目	スタジオプロジェクト科目	音響設計コース コア科目	展開科目	共通科目
修士研究関連科目	スタジオプロジェクト科目	音響設計コース コア科目	展開科目	共通科目

(再掲は薄色表示)

(再掲は薄色表示)

学修目標			M1				M2			
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
B.知識・理解	文化・社会デザイン系統	B-4. 芸術文化と歴史を現代社会に活かすため、音や音楽に関わる歴史や文化における幅広い分野の知識を体系的に理解し、説明することができる。	音楽社会文化特論		民族音楽学特論		音楽社会文化特論		民族音楽学特論	
			言語学特論		聴覚文化論特論		言語学特論		聴覚文化論特論	
	設計・制作系統	B-3. 芸術・科学・技術を架橋するため、音や音楽に関わる作品制作や表現理論、技術について体系的に理解し、説明することができる。	音響芸術特論		作曲学特論		音響芸術特論		作曲学特論	
					サウンドデザイン特論				サウンドデザイン特論	
	デザイン工学系統	B-2. 音を物理的に解析・制御・評価する方法、すべての人に適した音環境を設計する方法、音響情報の適切な処理と伝達の方法などについて深く理解し、的確に説明することができる。			ホール工学技術特論				ホール工学技術特論	
			音声情報学特論		計算音響学		音声情報学特論		計算音響学	
			音響制御特論		福祉音響学		音響制御特論		福祉音響学	
			音響工学特論		音響イメージング特論		音響工学特論		音響イメージング特論	
			音響信号処理特論		音響環境学特論		音響信号処理特論		音響環境学特論	
	デザイン科学系統	B-1. 人間の視聴覚に関する知覚システムと生理的機序、音声生成の仕組みなどに関する専門的知識について深く理解し、的確に説明することができる。	音声生成特論		聴覚心理学特論		音声生成特論		聴覚心理学特論	
					聴覚生理学特論				聴覚生理学特論	
					時間知覚特論				時間知覚特論	
A.主体的な学び・協働	A-2. (協働) 多様な知の交流を行い、他者と協働し問題解決にあたることができる。	芸術工学特別研究Ⅰ		芸術工学特別研究Ⅱ		芸術工学特別研究Ⅲ		芸術工学特別研究Ⅳ		
		アカデミックイングリッシュ			芸術工学演習	アカデミックイングリッシュ			芸術工学演習	
	A-1. (主体的な学び) 深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討することができる。	芸術工学特別研究Ⅰ		芸術工学特別研究Ⅱ		芸術工学特別研究Ⅲ		芸術工学特別研究Ⅳ		
				芸術工学演習				芸術工学演習		
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
学修目標			M1				M2			
アセスメント・プラン			<ul style="list-style-type: none"> <li>・「導入・基礎」期の評価：研究計画に基づき着実に研究が進行しているかどうかを修士研究中間発表会にて確認する。</li> <li>・「統合」期の評価：修士論文及び修士作品審査と修士研究発表会にて確認する。</li> </ul>							